

近世日蓮宗批判史小考

『大聖日蓮深秘伝』について

宮川了篤

(一)

わが国において批判精神が著しく発展した時期は、江戸時代である。この批判精神を生んだ原動力は、西欧の近代学問の輸入による合理主義と、医学の流入による科学的思维と現実主義によるものであった。

こうした思潮をよりはやくとり入れたのが儒学であった。儒学は仏教の渡来と同時に日本に伝わり、禅宗寺院に従属し育てられてきたが、幕府が政治理念の要とし、官学として採用した。これによって彼等は仏教より脱し、独自の道を歩きはじめたのである。同時に、彼等は仏教の出世間主義に対する非倫理性を、現実主義の立場から批判するに

至った。これにつづき、神葬祭を因に神仏習合を批難する神道側、寺領の非生産性による損失を強調する経済学者、古典学的研究に力を注ぐ国学者等が提唱していった。特に科学的思维方法の成長の頂点として、文献学的見地から富永仲基の『出定後語』、服部天游の『赤裸々』、更に『後語』の影響を受けた平田篤胤の『出定笑語』等の、大乘非仏説論の出現をみるに至るのである。

一方、当時の仏教界は「寺請制度」によって幕藩機構に組し、経済的にもその基礎を確立していた。しかしそれがために僧侶の精神的頹廢が目立つ様になったのである。また当時の日蓮教団は、天文法難（一五三六）以後、折伏布教は教団にとって損失をまねくとして、摂受の立場をとつ

ていた。教学面においては天台に心酔し、権実論、本迹論の参究に終始していたのである。

他方、寺請制度内での布教の困難さを痛感し、出版(文書)による布教方法を採用したが、この方法も日蓮教団だけに限ったものではなかった。ことに宗祖以来、法華唱題思想と浄土念仏思想との宿命の対決にも似た、浄土系との批判論争がその大半を示していたのである。

こうした状況のなかで、日蓮宗に対する批判史を考察した場合、その源流は日蓮宗から天台宗へ改宗した真超の『破邪顕正記』五卷、『禁断日蓮義』十二卷によったと考えられる。かかる真超の著述は、『好色万金丹』、『傾城禁短気』などに擬られ、「好色」文学にも取りあげられる一方、禅宗より還俗した多田宣綿(生亡未詳)、別名松本鹿々の『日本仏法穴搜』四卷、さらに国学者平田篤胤の『出定笑語』へと影響をあたえていたのである。

以上のような近世日蓮宗批判史のおおまかな系譜のなかで、もっとも特異な存在にあるのが『大聖日蓮深秘伝』である。

(二)

『大聖日蓮深秘伝』は写本二冊本で、略称「深秘伝」とよび、一般的には明治十三年に刊行された『深秘伝』の名で知られている。本書は二十八章(明治二十二年版の

み、二十七章)の稿節と奥書からなり、巻頭に「嚴戒、門外不出秘要感也、未為貫主不許閱焉」と記されている。内容は、「宗祖は不義の子で、身分のいやしい旃多羅の生まれのため、子供の頃から軽蔑されて育った。従って、いきどおる心から天下に名をあげたく思っ出て家し、南無妙法蓮華経をもって他宗を批判したのである。しかし口ではお題目をとなえていても、心には弥陀を念じていたのである。また宗祖の数々の奇蹟は幼少の頃でなづけた妙太郎、法太郎なる狐の兄弟が手助けしてくれたものである。以上のような事柄は、宗祖が我々に語ってくれたものではあるが、これは我宗の一大事でもあるから決して他に洩さず、秘しとうさなければならぬ。

弘安五年壬午季冬書身延山廟堂之燈下。

日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持(花押)(趣意)といったもので、日蓮聖人の回顧録形式をもって記述されている。また奥書には、

右此一部ノ書考ハ日照聖人、日朗聖人等ノ御筆ニシテ、身延山第一ノ秘書ナリ。日常上人御定トメ、貫主タリト雖モ六十才未滿ノ内ハ拝見ヲ許サザルモノ也。然ル處十代日朝上人ノ御代、山内御評議ノ上、萬々一紛失等モ有之節ノ為メ、明應八年八月別ニ一部ヲ書写シ給フ。然ル處智積院日廣上人又密ニ此ヲ写シ給フ。是ニ依テコノ日廣上人ハ師匠ノ勘氣を承ケ撰出セラレ給フ。其時コノ

一部ヲ持テ岩本実相寺ニ隠レ給フ。此時身延山ヨリ御末山へ密々御頼ニテ、若コノ深秘伝見当リ候ハバ早く取上可申、若他宗ノ手ニ有之候ハバ、ヨクヨク謀ヲ廻シ是ヲ取戻スベシ、此事ヲ得スンバ其持主ヲ伐ツテ取上ヘシ、又他ニテ此書ヲ見テ悉ク知ルモノアラバ、此書ハ全ク高祖ノ実伝ニアラズト急度答へ可申段、御頼ニアリシ事也。委細ハ本山ノ記録ニ在ル事也。然處愚僧遊覽ノ砌、実相寺ニ於テ写之者也。

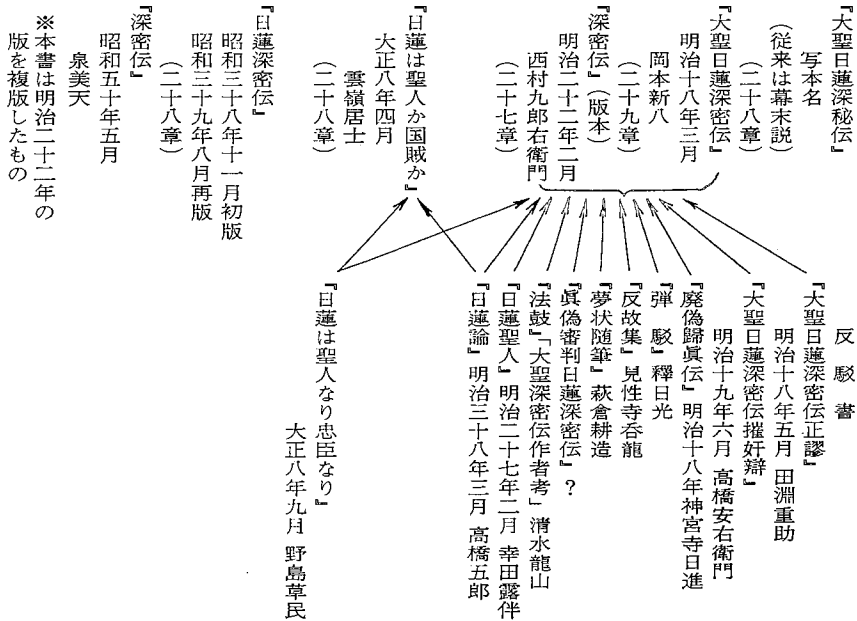
天正五年丁丑五月十三日 光長寺 日長

以上のように記述されている本書の意図は、あたかも日蓮宗教団の内側から書いたようにみせかけ、本書を読んだ者が日蓮聖人に対し、悪感情を抱かせることにあった。

そこで、このような偽作された伝記が、いつごろ、どのような人によって書かれたかを考察していくものである。

(三)

今日、『深秘伝』は幕末期に真宗の僧によって偽作された。と解疑されているのであるが、小稿は従来の幕末説に對し、江戸中期説を論証しようとするものである。その前に深秘伝は幾度も刊行され、そのつど反駁書が出されているので、下記の如く示しておく。



以上の反駁書のうちほとんどが、小川泰堂の『日蓮大士
真実伝』を使用していることが特色としてあげられる。ま
た清水龍山の「大聖深秘伝作者考」は、真宗の僧によって
偽作された証しとして、十三ヶ所にわたる文意を抜粋し列
挙している。また野島草民は、雲嶺居士とはいかなる人物
かを追究する一方、奥書にみえる光長寺日長が実在した人
物でないことを明らかにし、身延山をはじめ、関係各寺院に
そのような記録がないことを克明に調べている。他方、昭
和三十八、九年に刊行された『日蓮深秘伝』は、「新興宗
教の培養日蓮宗の実体」と題し、めざましい発展をとげた
創価学会、霊友会、立正佼成会等を排斥する手段として、
本書を用いるに至っている。

ではいつ、この様な伝が書かれたのかを論ずるにあたっ
て、浄土宗の大我の名を挙げ論ずることとする。

大我の字は孤立、白蓮社天誉といい、一般的には孤立天
我の名をもって知られている。大我は宝永四年（一七〇
七）、江戸に生まれ、十一才の時、自ら湯島真言宗霊雲寺
の恵光の門に投じて得度剃染した。二十三才のおり、感ず
る所があって従来の真言密教を捨て、浄土宗に改宗した。

その後大我は鎌倉の光明寺の称誉真察の会下に参じ、常に
称誉の坐右に稱すること十余年。かたわら南北の学匠と交
りを結び、法華、華嚴、戒律、禪等を参究する一方、儒学、
国学、武技、諸礼等をも究めたようである。ことにこの間

と推察される時期に身延に登詣し、「某の聖人を師とし」
日蓮教学を学び、『唱題成仏論』を草したといわれてい
る。その後大我は寶延三年（一七五〇）、山城八幡正法寺
二十二世の法灯を継承したが、数年にして辞し、了義日蓮
の『愍諭繫珠録』（一七一二刊）に反駁した増上寺定月
（一六六七―一七五〇）に招かれ、江戸の姥池愛蓮庵に寓
し、天明二年（一七八二）八月十五日、七十三才をもって
示寂した。

大我の著書には、『日本思想闘争史料』の一角を示める
『鼎定論』四巻を代表に、四十有余を数えることができ
る。そのうち日蓮宗を批判した著に『紫朱論』、『獅虫
論』、『曇華論』の三巻がある。特に『深秘伝』の著述年
代を類推するうえで大事な『紫朱論』は、別名「破二癡連
義」、略称「破二癡」とよばれ、一卷三十一丁からなる漢
文体で、「悲イ哉、繫珠録者ノ如キ毛ヲ吹テ瑕求ムト雖モ
（中略）繫珠録ヲ闢カ不ルヤ」と称している如く、了義日
醉（一六七四―一七四七）の『愍諭繫珠録』に反駁し、寶
曆十三年（一七六三）六月に出版された。本書の日蓮宗批
判の内容は、従来の権実論よりも、むしろ布教上における
実践面が主である。そこで趣意をもって要訳すれば、

一、二癡（日蓮聖人をさす以下同様）は天台の趣意を盜
み、狐を使つては人々を勞惑し、四十余年未頓真実の
文を信じては、四格言と称し他宗を批判している。が

何故に七面天女、鬼子母神、狐、狸まで敬うのか、ましてや刺髪染衣、造仏管寺、引導炬、祈禱咒願等の全てが爾前の諸行であるのにもかかわらず、爾前を信じない二癡が何故に爾前の諸行をするのか、これは二癡が権実に戯むれている為である。

二、曼陀羅には大曼陀羅、法曼陀羅、三摩耶曼陀羅の三種類があるが、二癡の書いた曼陀羅は以上の曼陀羅のいづれにも属さず、雑乱はなほだしく本尊とはいえない。また蓮の字には仏蓮、鬼蓮の二種類あるが、二癡の髭題目は鬼蓮である。従って二癡の徒に禍が多いのもこの故である。

三、二癡の徒は高坐に瞞肝して頭を掉り、肩を張り机を叩き咳を高くして、吾が日蓮大菩薩は云云と誉称え、無難無病安産安穩前寿富榮を得ると説いているが、二癡の伝記をみれば災難だらけで、その徒は貧困の者が多く、白癩、赤癩にかかり、寺には童男童女の墓ばかり多く、どこに利益の証があるのか。ことに数珠、木劍を握り、婦人の手を振らしてその手に狐の術を使っている。この様な諸行は本山嚴命をもって制止すべきである。かくの如き二癡の徒の教之を信ずれば無間地獄に墮つるであらう。

このような大我の批判内容は、当時、権実論、本迹論の参究に終始していた本宗の学僧を当惑させ、「宗旨の本義

を以て、浄土教学に対応することは十分でなかった」(執行海秀著『日蓮教学史』二九六頁) ようである。

江戸期における日蓮宗批判の特色は、天台の教義を盗んだ。狐を使い、狐をおがんでいる、と云うものが多いが、大我の批判も同様といえる。かかる大我の『紫朱論』における批判の一角に(原漢文、二十四～五丁)

二癡之徒闇昧無智ニシテ、其ノ宗ヲ開ク之本致ヲ知ラズ、乃チ宗門ヲ蕃昌ニセント欲シ、種々ニ華説ヲ為シ、心ニ弥陀ヲ信ズト雖モ、而ロニ誹謗シテ為ス也。我身延山久遠寺ノ血脈ヲ閱スルニ、南無阿弥陀仏ヲ以諸経諸仏諸神及ビ六道ニ配シテ曰ク、法華ノ一大事、日蓮相承血脈念仏至極ナルカ故ニ常ニハ秘シテ申サズ也。南無妙法蓮華経ヲ以テ平常ノ行ト為、宗々差別ヲ顯説スルカ故也。弥陀ヲ言語ニ顯サズ、深ク秘シテ強テ誹謗ヲ為シ、心中ニ弥陀ヲ念ス須ク、吾カ宗ノ極意弥陀ノ威力ヲ以テ仏ト成リ道ヲ得ル者也。故ニ一念弥陀仏即滅無量罪現受此業後生清浄土ヲ以テ、臨終ノ一大事因縁ト為ト云云(中略) 予嘗テ諸宗ニ遊フ、次テ甲ノ延山ニ登リ、錫ヲ方丈ニ懸テ、某ノ聖人ヲ師トシ宗趣ヲ講習ス

と述べている。ここで大我のいう「甲の延山ニ登リ」、「某ノ聖人ヲ師トシ宗趣ヲ講習」したことは前にも述べたが、「身延山久遠寺ノ血脈ヲ閱」したなどということは、大我の作りごとである。しかし、「身延山久遠寺ノ血脈」こそ

『深秘伝』の奥書でのべられている「身延山第一ノ秘書」を指すことに疑いはない。そこで大我のかかる記述と、

『深秘伝』の「破邪教正章」で述べられている、

念仏等ヲ誹謗スルトモ、心ニ信シテ一聲ヲ称フレバ、滅罪スルコト疑ヒナシ、殊ニ吾宗ハ仮ノ題目称ヘテ、心ニ深ク念仏ヲ懐クカ故ニ、罪ト云罪ハアルヘカラス

と、「詠歌口伝章」の

他宗ノ如ク口ニ顯シテ、念仏スレバ全ク無間地獄ノ業ニテ、經ニ深ク心ニ念仏スルモノト疑玉ヒテ候エハ、吾宗ニテハ心ノ中ニ深ク念仏スルヲ本トスト、題目トハ是念仏ノ仮名ナリ、是ヲ知りテ称ヘハ題目ニ自ヲ念仏ノ利益コモルガ故ナリ

等を比較しても明かなる如く、まったく同一の事をいっている。大我の記述から察しても判明するように、大我が『深秘伝』を読んだことになる。従って『深秘伝』は『紫朱論』の出版された、寶曆十三年（一七六三）以前に書かれていたのである。

即ち、従来の幕末説に対し、江戸中期説を提唱するものである。

※『深秘伝』は、平田篤胤の『出定笑語』附録「神敵二宗論」における、宗祖の出生にそのまま影響をあたえた。

出版書案内

日蓮の伝記と思想

現宗研編

隆文館

日蓮聖人の一生と信仰・思想を、遺文にもとずいてわかりやすく解説した一般むけ啓蒙書。現宗研関係および教化研究活動にたずさわる本宗教師三〇名の執筆による日蓮宗徒必読の入門書。

定価一三〇〇円

申込皿 東京都千代田区神田和泉町一番地九

電話 (〇三) 八六一―九六〇五

振替 東京 一五三一〇二番